

令和 6 年度 第 1 回小城市総合教育会議（要旨）

日 時 令和 7 年 1 月 20 日（月）10：00～

場 所 小城市役所（西館 2 階）大会議室 A・B

1 開 会（10:00）

（市長）

- 昨年末から今年の初めにかけて、教育長からインフルエンザが蔓延し、学級閉鎖を行ったという情報を随時もらっていた。まだまだ、インフルエンザやコロナは収まらない状況であり、罹患すれば家族全員に影響が及ぶため十分に気を付けていただきたい。
- 年明け最初の行事として、二十歳の式典が開催され、小城市では 433 名が新しく二十歳を迎えた。二十歳を迎え、これから大きく羽ばたいていく若者の凛々しい姿を見せてもらった。非常にいい式典だったと思う。また、式典では教育委員の皆様にも出席を賜り本当に感謝を申し上げたい。
- 去年は、元旦から地震や大きな事故のスタートだったが、今年は平穏なスタートとなっており安堵している。ニューイヤー駅伝では、ひらまつ病院が昨年と同様の 24 位ということで、本当によく頑張ってくれた。また、2 月には県内一周駅伝があるが、いよいよ前人未踏の 13 連覇を目標に掲げてやっているの期待している。
- 去年は、国スポ・全障スポで佐賀県全体が非常に盛り上がり、スポーツで感動した年だった。いろいろなスポーツや文化活動に触れ、子どもたちが人として大きく成長していく中で、全国レベルのスポーツの大会が佐賀県で開催されたことは、大きな意味があると思うし、これで終わりではなく、これを踏まえて、これからどういうふうにもスポーツや文化活動に繋げていくかが非常に大事になってくると思う。
- 物価高騰で、学校給食の問題など学校生活に様々な影響がでていると思っている。その中で、子どもたちが安心して教育を受け、感性豊かに成長していくためには、どうあるべきかを、この会議の中で話し合いをし、日々子どもたちの成長を見守っていければと思う。
- 今日は、議事として I C T 教育関連や中学校の部活関連の報告を聞きながら、忌憚のないご意見をいただければと思う。

2 総合教育会議の概要について

（総務課長）

- 資料により、総合教育会議の概要を説明。

3 議 事

（1）I C T 活用教育の教え方・進化・変化等について

(学校教育担当部長)

- 資料 1 により、1 人 1 台端末の活用事例を説明（資料として一覧表にまとめている）
- 資料 2 により、I C T 活用による評価の変化について、3 つの項目を説明

(市長)

- G I G A スクール構想が国から打ち出され、電子黒板やタブレットの整備が一気に進み、学校の教育環境が大きく変化した。そういった中で、子どもたちや先生方も新しい教育環境に移行したわけだが、I C T 教育を見ていると、ものすごく幅が広く奥が深いものであると感じた。これからの I T 社会を生きていくためには、I C T 教育が重要であると理解をしている。I C T 教育が、子どもたちの将来にどう影響力があるかということを私も考えたりしている。
- 私たちの時代の小中学校の勉強は、通知表の数字で評価されて一喜一憂していた。また、小中学校で習っている内容は、教科書に基づいてそれを暗記することが結構多かった。その教科書に基づいて勉強し、暗記をしながら理解をしていくことになる。それが、高校、大学入試の問題となってそれをまた解き、それで合否が判定されて次に進むという流れだった。
- この I C T 教育を見てみると、暗記も大事だが、いかに内容を理解し、どういうふうに関わっていくかという部分は、以前の教育と大きく変わったと感じている。I C T 教育は、いろいろなソフトを活用しながら勉強するが、それを自分自身でどう活用するかということに非常に重きを置いている。それが、小学校・中学校・高校・大学と学んでいく中で、自分の進路というものに大きく影響が出てくると思う。I C T 教育の状況を見られた中で、これからこうあるべきではないか、何かこうした方がいいのではないかというご意見があれば、委員の皆様からご教授をお願いしたい。
- 新型コロナウイルス感染症が流行してからオンライン化が加速し、社会情勢の変化のスピードが速くなったと感じている。知人との会話の中で、会社に行かなくても自宅で仕事ができる環境が用意されたため、テレワークを利用しているという人も増えていると聞く。例えば、東京にいなくても仕事ができるため、自分が働きたい場所を選び移住している方も増えていると聞く。このように、仕事のあり方や働き方がいろいろと変わってきている状況の中で、これからの社会に適合するために、この I C T 教育は必要不可欠ではないかと思う。委員の皆様が感じたことや思うことがあれば、ぜひ、お聞かせいただければと思う。

(教育長)

- タブレット端末については、令和 3 年 4 月から導入し 4 年が経とうとしている。教育委員の皆様も、その経緯、経過を理解されており、電子黒板の導入も含め、この数年で授業のあり方が大きく変わっている。これらを活用して、子どもたちがどう力をつけていくかということは、市長が話をされた個々人の活用能力になってくると思う。個別最適化と言われるように、主体的な学びをどのようにして、このタブレットを活

用し実現するか。それと、タブレットで学習した内容を、それぞれの生活や今からの生き方に活用するか。いろいろな活用の仕方があると思う。今まで、教育委員の皆様が経験された中での授業のあり方、または今後の進め方について、気付かれたところをご意見いただければと思う。

(吉田委員)

- 学校を訪問する度に、先生たちと子どもたちのタブレットを扱うスキルが年々向上してきていると感じている。先生が「パソコンを開いて」と言ったら、すぐに自分のタブレットを立ち上げて、感想を書いたり、入力したりとすごくできるようになってきているように思う。
- 一方で先生によっては、まだまだこれからかなと感じるところもあった。ある先生は、去年も一昨年もタブレットを一切使っておられず、教科書と黒板で昔ながらやり方をされていた。その時だけだったかもしれないが、せっかくそういった教育環境が整っているなら、使っているところを見せていただきたかった。また、優良事例があれば外部にも発信し、各学校でも取り組んでいただけたらと思う。

(永野委員)

- タブレット端末などを扱うスキルの向上は、吉田委員と同じように私も感じている。また、学校だけでなく子どもたちは、そういう技術に囲まれて生活しているせいか、慣れるのが早く、すぐに使いこなせているように思う。一方で、子どもたちにどのような力をつけさせたいかと考えた時に、新学習指導要領の中で「個別最適な学び」と「協働的な学び」と言われるが、私の意見としては、学校というのは極論を言えば「協働的な学び」の場で、意見の交流が大事であると感じている。
- ドリル学習などいろいろな学習方法がある中で、事例にあった「ジャムボード」を使った子どもたちの学びは、意見の交流がみられすごく関心を持った。知識・理解・技能は、個別の学びの中で身につけていくもので、思考・判断・表現は、お互い切磋琢磨していく中で身につけていくものであるが、「協働的な学び」にICTを活用してもらいたいと思う。学校訪問に行くと、どのくらい意見の交流ができているかを重点的に見ている。タブレットに向かって、子どもたちが自分で学んでいくことも大事だと思うが、意見の交流を通して切磋琢磨し互いに学んでいくことが、もっと自分を表現し、お互いに伸びていくのではないかなと思う。

(荒巻委員)

- 私が現職の最後の辺りで、小城市がICT教育を導入され、それから授業のあり方が変わってきたと感じている。資料のタブレット端末活用状況や学校訪問で授業を見ても子どもたちは、タブレットを文房具のように自然に使うことができている。また、先生たちもジャムボードなどを活用し、子どもたちの考えをうまく取りまとめて授業をされている。

- 最近、あるネットニュースで、過度なデジタル化が原因で、以前に比べて「スウェーデンの学力テスト」のレベルがものすごく下がったという記事を見た。日本でもデジタル教科書を使う流れになっていると聞き、日本もスウェーデンのようにならないか不安を感じている。デジタル教科書を使用する場合、紙の教科書を持たなくなり、タブレットを開いて操作していくため、書く機会が減少すると思う。小学校では、基礎や基本を大切にしなければいけない。自分の感想を書くこと、書いて練習すること、書いて解くこと、それが大事ではないかと思う。
- 社会では、市長が言われたようにリモートで仕事をする場面もあると思うが、常にリモートで仕事をするのは絶対にはないと思う。場面によって、有効にリモートを活用されていると思う。
- 教育現場では、人と人とのつながりの中で、相手のことをしっかり知り、そして五感を働かせるべきと思う。
- 現職時（管理職になる前）に、奈良県の奈良女子大学教育学部附属小学校の研究発表会に参加したことがある。その時に、総合的な学習が導入され、その研究発表会も総合的な学習がテーマだった。ある5年生のクラスの子どもたちが、グループごとに自分たちで考えたことをいろいろな現場に行き行って調べて、それをまとめて発表していく授業だったが、その時に、現場に行き行ってメモを書く。そのメモを今度は学校に戻って清書して、その清書した紙を学習の木、実りの木に貼っていく。それで終わらず、もう1回自分のノートに書く。そして記憶していく。この3段階同じことを書くことで、子どもたちの頭の中が整理され思考がまとまり、みんなの前で表現することにつながっていくと強く感じた。これからは、ICT教育と今まで実際に書いたり読んだり覚えたりということを両立しながら、両輪で、これまで教員が培ってきた授業の技術等を、次の若い先生方に引き継いでいただきたいと思う。

（梶原委員）

- ICT教育が導入された当初は、それを使って学力を向上するためにあると思っていた。しかし、市長が言われるように、これからIT社会に生きる子どもたちに、学力の向上だけではなく、そこを超えて、この不透明な時代を生きる力を身につけさせてやらなければならないと感じる。ICT教育を導入したから学力が上がったというような検証の仕方をするべきではないと思う。例えば、先生が授業で問題をだされた場合に、はい、パソコンを開いて調べてみようではなく、子どもたちが自主的に、それぞれの考えで問題を解決していく力を養うために、ICT教育を活用すべきだと考える。もちろん、共同学習や基本的な学習は絶対必要であるし、それを踏まえたうえで、基礎的な力が身につく、自分で判断して解決法を導き出す、そういった力をつけていく必要があるのではないかと思う。最初は、ICTを使って学力がどれくらい向上するかの検証をすると思っていたが、それだけでなく、もっと先を見通した力を身につけることが必要と感じている。

(飯盛委員)

- 授業参観を見ていると、今の子どもたちはゲームに慣れているので、ＩＣＴ教育にもすぐ対応できていると感じる。さっきおっしゃられたように、タブレット端末を使って学力を向上させるだけではなく、子どもたちがタブレット端末を使って感動やわくわくするような授業を経験すれば、知識につながっていくのではないかと思います。市長がおっしゃられたように感性・感受性・五感で感じてくれる子どもがもっと増えてくれればと思う。例えば、音楽の授業で先生が声を張って歌われることを、耳・肌・いろいろなところで感じている子どもを見ていると音楽の授業も大事ということを感じたりする。

(白木原委員)

- 学習指導要領が改訂されたようだが、ただ知識を先生たちが教え込むのだけではなくて、子どもたちが自ら疑問を持ち、それをグループ学習などで意見を交わし解決していく、いわゆる子ども主体の授業を展開するような目標が謳われている。ＩＣＴ教育が始まってもう４、５年経つが、ＩＣＴ教育の目標としては、ＩＣＴを利用することで子ども１人１人の特性に合わせた学びを育むことができるころだと思う。
- 先生たちは、このＩＣＴ教育で、子どもたちがどのくらい理解しているかということ、可視化できると思う。ということは、それに応じて子ども一人一人にオーダーメイドではないが、こういう教育の仕方がいいという目標を立て実践することができると思う。このＩＣＴの教育を大幅に利用していただきたい。
- 紙の教科書は必要だと思う。デジタルもそうだと思うが、やっぱり紙の教科書の評価というか、すぐ見ることができるし、記録に残るのでいつまでも必要だと思う。
- ＩＣＴ教育は、お金がかかるので、自治体によってお金をかけられる自治体とかけられない自治体があると思う。ＩＣＴ教育の導入が、自治体の財政面で差が出てくるのかと考えたりもする。

(市長)

- 委員の皆さまからそれぞれご意見を聞かせていただき、本当にいろいろなＩＣＴ教育に関する思いをしっかりと持っていらっしゃると感じました。それで、ちょっと思ったことですが、４月１日の年度始め式の時に、新たに赴任された先生方や新採の先生方に挨拶をさせてもらいますが、そこで毎年話させてもらうことが、ＩＣＴ教育が導入され、それに対応するため勉強し、スキルアップをするのも大変ですねという話をしてきた。
- もう１つは、「アナログ」と「デジタル」の話をします。あくまで学校のＩＣＴ教育というのはデジタル教育です。今の子どもたちは、生まれて２、３歳になるとタブレットを指で触れ、慣れてしまっている。そういう形で、小学校や中学校に上がっていくということになると、タブレットやパソコンの操作に慣れ切っているため、暇になったらゲームばかりするし、人と人との会話も電話ではなくて、メールでしてしまう。

そういうふうな世の中の流れが出来上がってしまって、そういう子どもたちを今の社会が作っているわけです。だから、ICT教育をしたら学力向上したと聞くと、なかなか分からない。我々が言う学力向上というのは、どちらかというと教科書教育をして、教科書通りの覚え方をして、それを試験で解答し、それがよければ学力の向上であるとする。でも、今の学力向上はそうなのかと他に教科書だけではなくて、いろいろな分野があるということを言ったが、いろいろな分野を学んでいく中で、総合的な学力が向上しているとか、なかなか分からない部分がある。でも、非常にそこで大事なものは、やはり「アナログ」で、アナログってというのは、相手を見て話ができるかとか、返事や挨拶もできているかとか、先生や目上の人に対し敬う心を持っているかという、基本的な部分ができていて、かつ、デジタルを駆使しながら、人間的に成長していくことが非常に大事だと感じる。だから、学校教育や家庭教育の中でも非常に大事なことであるが、人として成長するために何が必要なのかということを、ICT教育の中では、伝えていくのはなかなか難しいかもしれないが、アナログというのは非常に不可欠で、「アナログ」あつての「デジタル」ではないかと、今日の話の中でもそういったところを、感じておられると思った。

- 私は、新年のスタートにあたって、必ず色紙に4文字熟語を書くが、今年は、「不易流行」を書いた。これは、私が最初に小城町長になった時のまちづくりの基本ですが、今年も1番最後、最初のスタートにあたって、「不易流行」を書いた。これは、まちづくりもそうですが、教育や人づくりにもつながることではないかと思っているので、そういった意味でも、人を育てる中で、アナログの部分は非常に大事だと思うが、そのあたり飯盛委員は何か思うところがあるのではないのでしょうか。人を導くというのをいろいろお話しされていると思うので、教育の中にもその分野が非常に大事と思うので、何かコメントがあればお願いしたいのですが。

（飯盛委員）

- 最近テレビで見ましたが、会社を退職するのも人任せ、そういう退職代行業者があるとテレビであっていましたが、おっしゃるように人と面と向かってこの肌感、よく言われる人と人との間が人間ですが、そういうのがひょっとするとこれから先必要なくなってくるのではないかという不安を持っているところです。市長がおっしゃられるように、そういうところは残ってほしいと思う。

（市長）

- これからの子どもたちに私が危惧するのは、コミュニケーション能力と感じている。外国では、いろいろなディベート教育を行っていると聞いているが、子どもたちが対面しながら話をするというコミュニケーション能力、これは市役所でも非常に大事であるが、高学歴で入った人でもなかなか人と対面して話す時に、コミュニケーションができないという子も現実的に育ってきている。だから、コミュニケーション能力やディベート、そういったものをどういうふうにこれから活かしていくのか。ある程度、

高校や大学に行かないと、そういった分野の勉強をしないかもしれないが、小中学校の中でもいろいろと大事なものがあると思う。

(2) 小城市中学校の部活動地域連携について

(学校教育担当部長)

- ・令和6年度 小城市内の部活動の現状（4中学校） 別紙資料を基に説明

※外部指導者と部活動指導員の違いを説明。

- ・これまでの地域連携の流れについて 別紙資料を基に説明

- ・今後の課題について 別紙資料を基に説明

※令和6年度の計画では、当初8名を予定していたが、12月までになかなか見つからず5名であったが、1月からひらまつ病院の協力を得て8名になった。ただ、外部指導者等に打診をしても、部活動指導を引き受けていただく方が少ないというのが現状である。非常に責任が重くなり、外部指導者のままだいいという方が多い、中には、部活動指導員を本人は了承されても、勤め先の了承を得られない事案が発生している。

- ・部活動についてのアンケート 別紙資料のとおり

(市長)

- ・ 中学校の部活動地域連携について、田舎の町じゃなくて、大都市の中でこういった課題が政策として言われていると認識していた。都会では、地域のいろんなスポーツクラブに中学生の子どもたちを移行したらとか、もう1つは、顧問の先生方も土日試合の度に随行しなければいけないので、働き方改革を考えた時に、非常に重荷になっていると考えていた。先ほどの説明を聞いていると、少子化の中で子どもたちが段々部活することも少なくなって、結局部活がなくなっているのも現実的にある。例えば、軟式野球が3中学校合同で行われたり、柔道部がなくなったり、ソフトテニスがなくなったりと現実起こっている。
- ・ これからは、地域移行を考えていかないといけないと思っているが、先程の外部指導者、これは、ボランティアの指導者ですが、そういう方々が少ないということ。あと、部活指導員が顧問という立場になって、有償でこれを受けられているが、不足しているということ。その中で、非常に良かったことは、社会人として勤めながら、中学校の部活指導員として、お手伝いに来てもらっているという動きがあっていることは、非常にありがたいと思う。この地域移行については、どんどん進めていかなければならないと思っているが、現状、市内でも地域クラブが少ない中で、地域クラブがあるところは移行できるが、ないところは部活動をやらざるを得ない状況があると思う。中学校の顧問の先生は、経験があるスポーツの顧問になればいいが、全く経験がないスポーツの顧問をやらざるを得ないことが、非常に重荷になっている部分もあると思っている。この問題については、これからどういうふうに進めていくのか、先がちょっと見えない部分があるが、一步一步できるところからやるしかないと思っている

ので、委員の皆さまからご意見があればお聞かせいただきたいと思います。

(教育長)

- 部活動のあり方については、やはり少子化の問題が1つ、それと、先生方の働き方改革が1つ、それから、子どもたちの求めるものが多様化しているというのが1つ。これらの大きな3つの問題がある。コロナ禍になって、先程出たGIGAスクールが令和3年度から、部活動の地域移行が令和4年度から国の方針として出された。国の方針として、令和8年度までに地域移行しなさいと示されたが、現場に非常に大きな混乱をまねく恐れがあったため、小城市では現状を見ながらやっていくということを説明した。期限を設けてやるべきものではないと感じた。
- 部活動の地域移行については、自治体によって様々で、都会でやったらこのケースは合うかもわからないし、佐賀県の中でもいろいろ違う。都道府県の教育委員会の中で話し合いをしても意見が様々だった。このことは、委員の皆さまも意見交流の中であったかもわからないが、そういう状況の中で一番大事になってくるのが地域連携である。いかに地域連携をしていくかということを中心に今進んでいると思う。
- もう1つは、部活動指導員というのは教員と同等の役割を担うことができる。外部指導者はボランティアだが、この外部指導者から部活動指導員になろうという方は、本当にありがたいと感じているが、場所によっては、なかなか確保できない。いろいろな企業のスポーツの方々、特に小城市もその協力をいただいている企業もあるが、そういう地域の協力の体制を見ながら、これは進めなければいけないということと、子どもたちのニーズがいろいろあるので、子どもたちの意見やニーズを叶えるような活動になるべきと思う。現学習指導要領では、部活動は教育の一環としてという文言がある。だが、10年後の学習指導要領がどう変わってくるのか、心配な部分があるわけだが、そういうことも含めて現状を見ながら、教育委員の皆さま方に忌憚のないご意見をいただければと思う。

(吉田委員)

- この問題について、私もまだ十分理解ができてない部分が結構ありまして、まず、質問からしたいと思う。
- 令和4年8月に、三日月中の女子バスケットボール部が地域クラブへ移行し、それから令和5年5月に小城中の女子ソフトテニス部が地域クラブへ移行になっているが、この地域クラブへ移行したということは、その学校では部活動はあってないということでしょうか。そしたら、その指導者は一体誰なのか、どういう立場の人なのか、また、練習場所はどこで行われているのかをお聞きしたい。
- 部活動指導員の数が8名となっているが、小城中・三日月中・牛津中に部活動指導員さんがいらっしゃるようだが、その部活動指導員さんが指導されている部活の種目は何か、わかれば教えていただきたい。

（学校教育担当部長）

- まず、三日月中の女子バスケットボール部と小城中の女子ソフトテニス部の部活動については、廃止され現在部活動を行っていない状況である。
- ただ、これらのクラブは、元々ジュニアのクラブがあったところが、中学部を作った形ですので、ジュニアの組織の指導者が中学生も一緒に指導している。練習場所については、三日月中の女子バスケットボール部は、三日月体育館で、小城中の女子ソフトテニス部は、小城公園のテニスコートで練習をしている。
- 部活動指導員の種目につきましては、2 番目の資料 4 のところに記載していますが、牛津中は、剣道・ソフトテニス・柔道の 3 名で、三日月中は、ソフトテニス・柔道・野球の 3 名だが、柔道は活動停止になっている。小城中は、バスケットボールである。

（梶原委員）

- 部活動に関して、その学校の教育活動の一環ということで、教育長も話されたが、今まで学校の先生方が、専門的な知識を持つ顧問の先生あるいは、そうでない先生含め、学校生活とリンクして子どもたちを一体的に指導していた。また、それは大きな意味では、生徒指導上の大きな役割を果たしてきた部分があると思う。それが、地域移行になった時にどうしても、これまでとは違った形になるのが、ちょっと心配をしている。働き方改革とか、あるいは、地域移行した場合、子どもたちの選択肢がおそらく増えてくるだろうと思っている。そこの利点はありつつ、学校での子どもたちの生活ぶりや部活動の生活ぶりがリンクしないということが心配である。
- 平日は、学校で指導され、土日は、別の指導者が指導するというケースが出てくると思っているが、そういった場合に、普段部活動あるいはその専門でなくても指導している先生方の指導方法と、土日の指導者の指導方法との見解や指導の違い、そのあたりがどういうふうになってくるか、ずっと頭から離れずにいる。
- アメリカでは、3 時までは授業中心の生活をし、それ以降は、地域移行をされている。それが本当になじむかどうかずっと心配ではあるが、いろんなことを乗り越えて、そういうふうになっていかざるを得ないという気持ちはある。

（永野委員）

- 梶原委員がおっしゃった学校の中で両面的に見ながら、人間形成をしていくというところは、すごくわかる。部活動に参加したいという子どもたちが半数いるなら、極力部活を存続して欲しい。できなければ拠点校方式で続けていただきたいと思う。その反面、少子化のこととか、先生方の中には部活が負担だと思っている方もいらっしゃるし、働き方改革もある。現場の先生方の声を聞くと、本当に大変だという声も聞く。そういう声を聞くと、部活動がいつまで存続できるのかと思うこともある。子どもたちにどんな力をつけていくか考えた時に、部活動の中で身につける力は大きいと感じている。

- 個人的な話になるが、私の子どもがジュニアの経験がなく、中学校で初めて部活動に入った時に、顧問の先生が真っ先に部活動は人間形成とおっしゃってくれた。その言葉は、今でも忘れられない。子どもたちの自覚を形成していく場として、部活動は存続してほしいという願いがある。子どもたちのコミュニケーションの場の減少を考えたときに、部活動が存続できないのであれば、それを受け入れてくれる地域の受け皿や協力体制が必要で、12歳から15歳までの子どもたちを、学校以外の場で育てていくことが必要だと思う。少し長期的な展望で少子化を考え、どこで子どもたちを受け入れるのかということを、部活動の検討委員会の中で考えていくべきと思う。

(飯盛委員)

- 私の子どもが高校で陸上をしている。部活動の先生は、専門ではないので少し物足りないようなことを言っている。また、中学校の時から社会体育で、週2回(火曜・土曜)指導していただいているので、それにも通っている。社会体育では、少し専門的なことを習っており楽しんで行っているが、子どもとしては、ただ陸上ができればいいという気持ちでやっているようで、学校の部活動が地域へ移行しても子どもたちはそう深くは考えなくて、その競技ができれば受け入れると思う。その環境整備等を私たちが問題ないようにしていくことができればというのが私の思いです。

(白木原委員)

- 少子化とか先生たちの負担軽減を考えたら、この地域移行は致し方がないと思う。私たちが中学生の時は、いろいろな部活に入って活動することが普通だったが、こういうふうに、三日月、牛津、芦刈が一緒になって練習するということも子どもたちにとっては刺激があっていいことだと思う。ただ、そこに行かないと活動できないということになれば、将来的に部活動の加入率はちょっと減るのではないかなという懸念がある。
- 資料では、スポーツ系の部活動しか載っていないが、文化系もあるので、文化系の部活動をしたいという子どもたちもいると思う。そうなった場合、クラブである程度の稽古料を払って運動や文化系の部活動をするということになってしまうと、経済的な格差の問題で、部活動をしたくてもできない子どもたちが出てくるという懸念を持っている。ただ、部活動をしたい子どもたちにとっては、連携して、技を磨いて大会に出て将来野球の選手になりたいという子どもたちもたくさんいると思う。楽しみながら部活動をしたいという子どもたちと、スキルを伸ばしたいという子どもたちがいるので、そのせめぎ合いをどう大人たちが考えていくのかというのが問題と思う。
- ある吹奏楽が盛んな地域では、指導者の先生にそれなりの手当を出しているが、市の補助金等が打ち切りになったら手当が登録者の自己負担になるので、登録者数を増やさないと指導者に手当を支払えないという記事があった。部活動やお稽古などは、スキルだけの問題じゃなくて、永野委員がおっしゃったように人との交わりによって人間形成につながることであって、そこで喧嘩したり泣いたり笑ったりすることが最も

大きな目標だと感じる。部活動をできなくなったら、家に閉じこもる子どもたちが増えるのではないかという懸念もある。いつまでこういうことを続けられるかということとは、私たち大人が考えていかなければならないことで、やはり中心は子どもなので、子どもたちが幸せになるためには、どうするかということを考えていかなければいけないと感じた。

(市長)

- この地域連携についてですが、これからいろいろと進めていく部分があると思う。中学校でクラブ活動をするというのは、白木原委員が言われたように、楽しみたいのか、またはスキルアップしたいのか、それぞれの気持ちがあると思う。スキルアップしたい子どもたちは、ひょっとすると高校進学をそれで選択をしたり、あるいは大学進学もそれで選択したり、人生の分かれ目に影響があると思う。だからこそ、クラブ活動は、体、心、精神を鍛えること、人間形成のなかで非常に大事なことだが、自分の進路にも大きな影響を与える部分があると思ったりしている。だから、子どもたちが地域交流するにしても、指導者の元で続けていってくれたらと思っている。
- 先程、私が言ったように、クラブ活動はアナログの部分で人と人との繋がりというか、子どもたち同士のコミュニケーションという部分が大きく占めると思っているので、地域クラブとしての存続、学校の部活動としての存続が無くなるのではということではなく、続けていくためにはどうすればいいのかということ、連携しながらやっていくことが大事であると、委員の皆さまのご意見を聞いて感じた。

(教育長)

- 今、市長が申されたとおり、今日の2つの話題の柱は、今から子どもたちを作る人的環境であったり物的環境であったりを、どうしていくのか。子どもを中心に据えた周りのサポートをどうしていくのかが大きな話題だったと思う。市長が冒頭言われたように、不易と流行、デジタルとアナログ両方とも相反するというか、ちょっと違っても分からないが、その融合された分が出てくる。不易と流行の修正版のアレンジしたものが必要になってくる。デジタルとアナログも、相まってやっていくという柱をいろいろ考えながら、人的環境や物的環境で、教育委員会としても人づくりをやっていかなければいけないということも改めて認識をさせていただいた。市長等に理解を得ながら、これから先も人づくりに向けてやっていけたらということを思っている。今回、話題にならなかったが、不登校やいじめ問題、特別支援教育の問題、これらも大きな課題である。これらも市長と協力しながら進めていかなければいけない大きな課題と捉えているので、今後とも、引き続き、よろしくお願いしたいと思います。本日は、ありがとうございました。

4 閉 会 (11:30)